

週刊 日本医事新報No. **4754**

2015/6/6

6月1週号

p19 特集

安全に使いこなす SGLT2 阻害薬

- SGLT2 阻害薬の副作用とその対策 (植木浩二郎)
- SGLT2 阻害薬使用時に注意すべき併用薬 (羽田勝計)
- SGLT2 阻害薬はどのような患者に適しているか (吉田瑛子ほか)

p1 巻頭

- 外来診断学: 原因不明のアナフィラキシーショックを主訴に受診した75歳男性 (生坂政臣ほか)
- プラタナス: あの夏の風景 (鈴木富雄)

p8 NEWS

- 医療保険制度改革関連法が成立—16年度から「患者申出療養」スタート
- OPINION: 長尾和宏の町医者で行こう!!
- 人: 山内英子さん

p33 学術

- Dr. 徳田の診断推論講座⑥ 胸痛・胸部不快感 (徳田安春)
- J-CLEAR 通信: 非心臓手術周術期における β 遮断薬治療ガイドラインの改訂 (許 俊鋭)
- 一週一話: 異所性脂肪とメタボリックシンドローム
- 差分解説: 非アルコール性脂肪性肝炎 (NASH) の病態解明 他8件

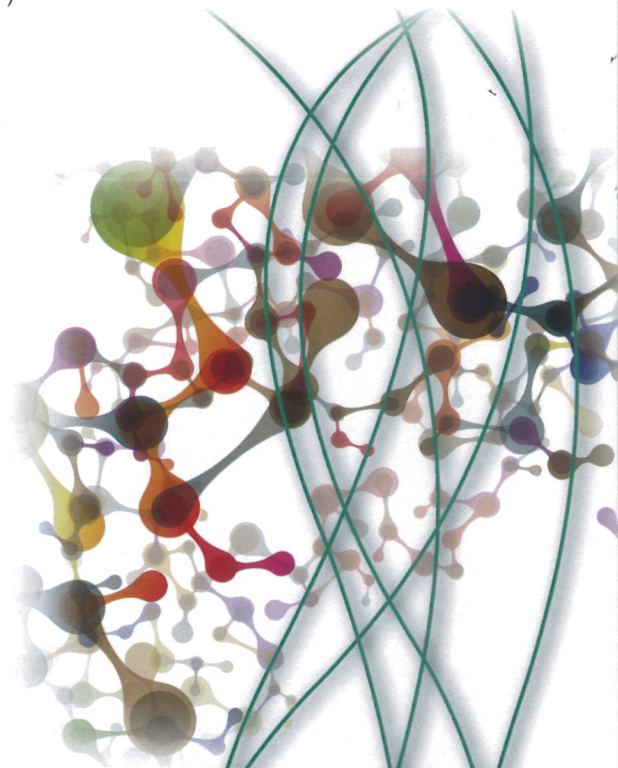
p52 質疑応答

- Pro \leftrightarrow Pro: MRSA 腸炎は存在するか 他4件
- 臨床一般: 抗インフルエンザ薬ファビピラビルの適応 他2件
- 基礎・研究: Ki-67 とは 他1件
- 法律・雑件: 看護師によるインフルエンザ予防接種の法的可否 他1件

p68 エッセイ・読み物・各種情報

- 小説「群星光芒」 ● エッセイ ● ええ加減でいきまっせ!
- 私の一冊 (野村良彦) ● 新薬 FRONTLINE ● Information
- クロスワードパズル ● 漫画「がんばれ! 猫山先生」

p83 医師求人/医院開業物件/人材紹介/求縁情報



尼崎発



長尾和宏の

まちいしゃ

町医者で 行こう!!

第50回

「開業20年目の町医者の地域貢献」

開業医になり20年が経過

早いものでこの連載が50回を迎えた。私のクリニックもこの6月で開業20周年の節目を迎える。阪神大震災の後、商店街の雑居ビルの2階で開業した。来院患者数は1桁台が続いたので、事務職員と私だけの静かなスタート。来る人ごとに日本一狭い診療所だと言われた。在宅患者の第一号はビルのオーナーさん。外来も在宅も閑古鳥が鳴き、現在と比べると嘘のように暇な昼休みだった。先輩から開業医のピークは20年目に来ると聞かされていたが、果たして20年後には100人を超えるスタッフを抱えるようになり生活も様変わりした。

数年前、無謀にも50歳を超えてレーシック手術を受けた。予定より角膜を焼きすぎたらしく遠視になった。細かい字が見にくくなり常に老眼鏡が必要となった。新聞は見出しぐらいしか読めなくなったので速読が上手くなった。その頃からパソコンに向かって文章を書くようになり、現在も年間数冊のペースで書籍を出している。国語が一番苦手だった自分がこうした拙文を書いていること自体、いまだに信じられない。在宅診療を含めた日常診療、地域での社会活動、種々の団体の役員としての活動、講演や執筆活動などに忙殺されるようになり、趣味のゴルフや旅行の時間がなくなったことが悩みである。

記念すべき今回は、そんな当法人の地域における課外活動についてご紹介させていただきたい。

NPO法人「つどい場さくらちゃん」との協働

約10年前、兵庫県が主催する「いのちと生きがいのプロジェクト」に応募した。公開プレゼンテーシ

ョンの場で、西宮市のNPO法人「つどい場さくらちゃん」を主宰する丸尾多重子氏を知った。当時はちょうど「痴呆」が「認知症」に変わろうとする時代。彼女は「これからは認知症の時代。介護者を支えんとあかん」と言っていたが、当時はその意味がよく分からなかった。「つどい場」の意味も分からないまま、「学び隊」「お出かけ隊」「見守り隊」などの活動をただ眺めていた。また「オムツ外し学会」や「かいご学会」に毎年登壇するうちに介護界のカリスマと呼ばれる人たちとも仲良くなった。医療界が介護界からどう見られているのかを知り、後に本を書く動機になった。果たしてその10年後、認知症が大きな社会的関心事となった。『ばあちゃん、介護施設を間違えたらもっとボケるで!』（丸尾氏との共著、ブックマン社）など認知症に関する一般書を世に出し、大きな反響をいただいた。

つどい場さくらちゃんの活動は、去る5月9日にTBS系の「報道特集」で紹介された。私や当院のスタッフも登場したが、認知症ケアについて大きな刺激になったとの意見がたくさん寄せられた。つどい場さくらちゃんに関わることにより、認知症ケアについて自然に詳しくなった。認知症ケアに関する尼崎市と西宮市の民間交流もますます盛んになってきた。医療法人と地域の社会福祉法人やNPO法人との連携は今後ますます重要になる。

地域の夜間高校の学校医としては、通常業務以外に健康の特別授業をボランティアとして続けている。生まれる、死ぬ、タバコ、がん、認知症などの健康に関する知識を地域の町医者が教えることは理にかなっていると思う。求められるままに禁煙教室でもあちこちに出向いてきた。

「生と死を考える市民フォーラム」と「尼から連携の会」

開業当時から、大小様々な健康教室も繰り返し開いてきた。10年前はまだ暇だったので土曜日の午後はほぼ毎週、糖尿病や高血圧、禁煙、がんなどの教室を開催した。さらに年2回、大きな会場を借りて「生と死を考える市民フォーラム」も開催するようになった。昨春は女優の木内みどりさんをお招きして平穏死を考える会に650人も市民が参加した。今春は丸尾多重子さんと私のダブル講演に350人が参加した。毎回、会場は満席になり大盛況である。

こうしたイベントは約20人の地域ボランティアにより運営されている。当法人の理念の柱は「地域貢献」なので、職員もたくさん手伝ってくれる。この数年間は尼崎と西宮で交互に開催しているので交流もずいぶん深まった。東日本大震災後には、被災地支援フォーラムを尼崎、西宮、神戸で開催し、集まった義援金は福島県相馬市の子供たちに届けた。

約10年前からの多職種勉強会は地域包括ケアを先取りした形になった。またケアマネと医師の連携の会だった「ケアマドの会」は、数年前から多職種連携の会に変わった。さらに阪神間の在宅医の勉強会である「阪神ホームホスピスを考える会」は30回を数えるが、一般の市民も参加している。この勉強会のおかげで阪神間の在宅医の連携が進んだ。そのほか、いくつかの地域連携システムを考える勉強会を継続している。

当院内においては、数年前から地域の多職種や行政担当者が集う「井戸端会」「どうにかせなあかん会」などを2カ月ごとに開催してきた。3年前からは「尼から連携の会」と改名し、事例検討を含め様々なテーマでの勉強会も開催している。現在、地域の独居認知症の在宅医療を24時間定期巡回随時対応型訪問介護・看護で対応しているが、こうした連携ができるのも、会で懇親を重ねてきた成果であると思う。

「弥生会」とフォトセラピー

当院では年間90名程度の在宅看取りがある。看取らせていただいたご家族に手紙を出して、3月に「弥生会」と称した振り返りの会を開催しており、毎年30人程度のお客がある。この語り合いの会では、必死だった当時には思いもよらなかった気づ

きをたくさんいただいている。

たとえば、よかれと思った私の言葉が本人や家族の気持ちを傷つけている場合がある。弥生会は、泣き笑いの中、こうしたちょっとした言葉の行き違いを指摘され我々がスキルアップできる場でもある。毎年、会が終わった後でスタッフと確認するのは「この会だけはどんなに忙しくてもやらないといけない」ということだ。癒したつもりの我々が癒されるのがこの弥生会である。当院では系統的なグリーフケアは行えていない。しかし看取りっぱなしではいけないと思い直し、始めたのがこの弥生会である。

春には在宅患者さんや市民のための花見の宴会も開催し、毎年数十名の参加者がいる。送迎が大変なのだが、1時間程度の花見ならやろうと思えば可能である。私を含めて職員や地域のボランティアが芸を披露して患者さんたちを和ませている。また冬には在宅患者さんや地域住民とのクリスマス会を開催している。こちらは職員が隠し芸を練習して披露する場でもある。普段お世話している看護師が楽器を演奏したり踊ったりするので、在宅患者さんは大喜びする。隠し芸の練習は各チームの連携を深めることにも役立っている。

こうしたイベントでは当院の国見祐治カメラマンが写真を撮り、ベストショットを引き伸ばしてプレゼントしている。フォトセラピーというらしいが、大好評である。在宅患者さんが亡くなられたら必ず葬儀の写真に使われるほどだ。今年2月、このカメラマンの写真集『下半身動かぬセラピー犬チャンネル』（ブックマン社）が出版された。私も解説を書いている。彼は私たちの日常の訪問診療にも同行して患者さんの写真や動画を記録している。患者さんとの対話を即日DVDにして本人と遠くの家族に届けているが、これも大好評である。

以上、当法人の地域での活動を紹介させていただいた。スタッフにとつての最大の悩みは、イベントが多すぎて忙しいことである。何事もやりすぎると良くない。しかし、今後でもできる範囲での地域貢献を地道に続けていきたい。

なお かすひろ：1984年東京医大卒。95年、尼崎市に複数医師による年中無休の外来・在宅ミックス型診療所「長尾クリニック」を開業。近著に「長尾和宏の死の授業」（ブックマン社）など